

IV-8 公共事業円滑化のためのPI チェックリストの作成に関する研究

香川大学工学部 学生会員 ○仁科 維之 香川大学工学部 正会員 白木 渡
香川大学工学部 正会員 森下 一男 香川大学工学部 正会員 井面 仁志

1. はじめに

我が国では、人々の価値観の多様化、地球環境問題、財政事情、公共事業の不透明さ、アカウンタビリティの不充分さなど様々な問題が発生し、公共事業に対して国民の厳しい目が向けられており、合意形成なしでは新しい事業を円滑に進めることが難しいといわれている。そこで、計画段階から広く関係者に情報を公開し、市民や関係者の参加をはかる住民参加（PI：Public Involvement）の手法が注目されている。白木らは日本にふさわしいPI実施システムを構築することを目的として、参加型人間工学並びに感性工学の考え方に基づいて、PI実施設計マニュアルの骨子を提案している¹⁾。本研究ではその提案をもとにPIによる公共事業円滑化のための事業担当者による事前のセルフチェックやヒアリング調査時における評価のばらつきを解消するためのチェックリストを作成する。

2. 参加型人間工学によるPI実施のプロセス

参加型人間工学（Participatory Ergonomics）の考え方に基づいて公共事業を進めていく方法として、感性工学、参加型人間工学によるPIのプロセスが長町三生氏によって提案されている。この提案は三つの基本的事項からなり、第一は情報提供であり、行政が住民に対して公共事業、地域情報に関する幅広い情報を常に公開しておく必要がある。第二は参加で、程度を表す尺度として、理解度1（情報提供）、理解度2（疑問解消）、理解度3（自我関与）、理解度4（アイデア提供）、理解度5（変化をつくる）の5段階の基準が提案されている。第三は住民グループの構築である。このプロセスでは、理解度という基準を用いているので、PIの達成度が確認でき、PIによる事業を進めていく上で非常に有効である。

3. PI チェックリストの骨子

土木学会四国支部²⁾では表-1に示す参加者の心理や行動からみたPI達成度のチェックリストを作成している。これは、事業担当者がA：「十分な取り組みをした」、B：「取り組みをした」、C：「取り組みが少なかつた」、D：「取り組みをしなかつた」、E：「取り

組み不明」の5つの評価ランクに従って記入するものである。このチェックリストは大局的な視点からPIプロセスの骨格をチェックすることには十分有効であるが、チェックする側の感性、価値観に左右され、一律の評価が得ることができないことが問題視されている。事実、ヒアリング調査を集計することで評価の基準が定まっていなかったことが読み取れる。本研究では、このチェックリストを骨子として、理解度と各段階のマトリクスの中にどのような項目が入るかを検討する。

表-1 参加者の心理や行動からみたPI達成度のチェックリスト

長町によるPIの原理	【第1段階】 意識①情報提供 やきっかけ 行動①きっかけ	【第2段階】 意識②理解する場 の有無 行動②行動の場 の有無	【第3段階】 意識③理解による 意識の変化 行動③行動の結果
理解度1： 情報提供一見せる・知らせる	●【情報提供・きっかけ】	●【情報提供の場】	●【フィードバック】
理解度2： 疑問解消一疑問を持つ・歩み寄る	●【疑問解消の情報提供・きっかけ】	●【疑問・質問の場】	●【疑問の解消】 ●【フィードバック】
理解度3： 自我関与一意見陳述・議論参加	●【意見議論のための情報提供・きっかけ】	●【意見・議論の場】	●【意見の有無】 ●【フィードバック】
理解度4： アイデア提供一具体案・設計への関与	●【アイデア募集の情報提供・きっかけ】	●【アイデア募集の場】	●【アイデアの有無】 ●【フィードバック】
理解度5： 変化をつくる一Self-Designing	●【参加者による意志決定のための情報提供・きっかけ】	●【PI参加者の意志決定の場】	●【意志決定の有無】 ●【フィードバック】

4. PI チェックリストの考案と有効性の検討

四国地方で行われてきた公共事業のPI事例リストアップ数109件のうちPI事例調査48件、ヒアリング調査数15事例中27件のデータベース²⁾を集計した。その結果をもとに、各理解度ごとに、共通するチェック項目を見つけ出し、また不足していると思われるチェック項目を付けたし、ヒアリング調査時における様々な回答形式を統一させ、チェックリストを考案した。

第1段階におけるいつ情報提供したかという項目では、各理解度毎に様々な回答形式があったので、解りやすくするため理解度毎の代表的な回答をもとにまとめた。どんな情報を提供したかという項目では、ヒアリング調査の結果、理解度1～理解度4までは、そ

の理解度における代表的な回答をまとめてチェック項目とし、理解度5は記述形式とした。誰に提供したかという項目では回答にあまり差がなかったので理解度1～理解度5まで共通のチェック項目としている。

第2段階の情報提供の場合は、ほぼ理解度1～理解度5まで共通しているが、各理解度毎に特有なチェック項目も取りいれている。場の設置回数を設けたのは、住民の理解の程度を大きく捉えることができるからである。

第3段階でのチェック項目は各理解度の意図を反映するように様々な形式になっている。フィードバックのチェック項目はヒアリングの回答であり理解度特有な事項がないため、有効であると考えられる項目を理解度1～理解度5まで共通とした。

チェックリストの一例として表-2に理解度1の場合のリストを示す。本研究ではこのようなリストを理解度1から理解度5まで作成している。

また、本研究ではチェックリストの有効性を検討するため、四国地方で実施された公共事業例を数例選び、考案したチェックリストを適用してみた。事例はPI事例調査によって明らかになった事業数の多い都市及び地方計画、公園緑地、複数の事業の組み合わせの例で、すでに実施されているヒアリング調査データベース²⁾を用いて、チェックリストの各項目にチェックを入れて、その有効性を検討してみた。その結果、PIプロセス計画時における事業担当者による事前のセル

フチェックやヒアリング調査時における評価のばらつきを解消するためには、十分に有効であることが確認できた。

5. まとめ

本研究では、PIプロセス計画時における事業担当者による事前のセルフチェックやヒアリング調査時における評価のばらつきを解消することを目的としたチェックリストを考案した。そして、そのチェックリストの有効性を検討するため、データベースから任意に事例を選び出し、その有効性を確認した。

しかし、今回使用したデータベースのアンケート調査数とヒアリング調査数がともに少なく、チェックリストの有効性を上げるためには、今後より多くのデータを集め、分析を行わなければならない。また、公共事業は予算、規模、期間などから様々な制約が加わってくることから、これらの制約を考慮の上、チェックリストのチェック項目を重み付けし、得点であらわせるようにしなければならない。これらは、今後の課題と考えている。

【参考文献】

- 1) 白木渡他：住民参加型人間工学手法に基づく公共事業の進め方に関する研究，建設事業の技術開発に関する助成事業，社団法人 四国建設弘済会，pp.121-140，2001
- 2) 土木学会四国支部：四国地方の市民参加型公共事業の進め方に関する調査研究，平成13年度報告書，pp.1-156，2002

表-2 理解度1のチェックリスト

長町によるPIの原理	【第1段階】 意識①情報提供やきっかけ 行動①きっかけ	【第2段階】 意識②理解する場の有無 行動②行動の場の有無	【第3段階】 意識③理解による意識の変化 行動③行動の結果
理解度1: 情報提供一 見せる・知 らせる	●【情報提供・きっかけ】 ・いつ ☐ 当日 ☐ 1日～1週間前 ☐ 1週間～1ヶ月前 ☐ 1年以内(ヶ月前) ☐ 1年以上前(年 ヶ月前) ・どんな情報 ☐ 事業計画案 ☐ 制度内容 ☐ WS参加案内 ☐ 関係個所の現状 ☐ 事業理念 ☐ その他() ・誰に(何名くらいに) ☐ PI参加者 {1.全員 2.()人} ☐ 市民 {1.全員 2.()人} ☐ 地域住民 {1.全員 2.()人} ☐ 町内会 {1.全員 2.()人} ☐ その他() ・各プロセスの中で意識的に「提供しない」情報() ・その理由は ☐ 先入観を与えないため ☐ その他()	●【情報提供の場】 ・情報提供の場(手段は) ☐ PIの場 {1.ワークショップ 2.懇談会 3.委員会 4.協議会 5.総会 6.その他()} ☐ 現地確認 ☐ 新聞(折り込み) ☐ 広報 ☐ ビラ ☐ ニュース ☐ 学習会 ☐ アンケート ☐ インターネット ☐ その他() ・情報提供の場の設置回数()回	●【フィードバック】 ・「理解度-1」の取り組み結果の情報をPI参加者に提供する手段 ☐ 資料(ワークショップ用紙、パンフレットなどを郵送) →☐ 意見記述用返信はがき付き ☐ 新聞記事 ☐ ビラ ☐ 広報 ☐ 日誌 ☐ 当日PI終了後 {1.議論 2.資料で回答} ☐ 次回までに課題を提示 {1.議論 2.資料で回答} ☐ 次回PI {1.議論 2.資料で回答} ☐ その他() ☐ フィードバックはしなかった